

# 山部赤人「登神岳作歌」における「恋」表現の意義

汪 治 東

登神岳山部宿禰赤人作歌一首并短歌

三諸の 神名備山に 五百枝さし 繁に生ひたる つがの木のい  
や 継ぎ継ぎに 玉葛 絶ゆることなく ありつつも 止まず通は  
む 明日香の 古き都は 山高み 川とほしろし 春の日は 山し見  
がほし 秋の夜は 川しさやけし 朝雲に 鶴は乱れ 夕霧にかは  
づはさわく 見ることに 音のみし 泣かゆ 古思へば

(卷三・三三四)

反歌

明日香川川淀去らず 立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらなくに

(卷三・三三五)

〈一〉 問題の所在

山部赤人「登神岳作歌」(卷三・三三四、五)は、明日香の旧都を対象とした歌である。この歌は「三諸の…繁に生ひたるつがの木」

などの植物描写から始まり、明日香の美しい自然景観―「山」「川」「春の日」「秋の夜」など―を歌い上げた後、「見ることに音のみし泣かゆ古思へば」で過去への思いを表現し、反歌では「思ひ過ぐべき恋にあらなくに」という表現で締めくくられている。

ここで注目すべきは、長歌末尾で「古思ほゆ」ではなく「古思ふ」という表現が用いられていることである。<sup>(1)</sup> 懐古歌において過去への思いは、しばしば自発的・受動的な情緒―「いにしへ思ほゆ」―として表現されるが、この歌では意志的な行為を表す「思ふ」が選択されている。これは歌人赤人が意図的に「古」を喚起しようとする積極的姿勢を示すものと考えられる。

当該歌の解釈をめぐって、従来の研究は大きく二分法的理解に基づいている。すなわち、冒頭の植物描写から「朝雲に鶴は乱れ夕霧にかはづはさわく」までの自然景観描写部分と、末尾の「見ることに音のみし泣かゆ古思へば」という感情表現部分として捉える見方である。一般的な讚美歌であれば、美しい自然描写の後に「見れど

飽かぬ」「うまし国ぞ」といった直接的な讚美表現で締めくくられることが多い。万葉集中の国土讚美歌においても、自然景観の描写から讚美の表現へと展開する構成が基本的なパターンとなっている。

このような伝統的パターンに対し、赤人の当該歌では豊かな自然描写の後に「音のみし泣かゆ」という激しい悲嘆が表現されており、この落差が注目されてきた。この表現上の特異性をめぐって、従来の研究は大きく三つの方向に分かれる。

第一は、美しい自然描写から悲嘆への展開の「矛盾」に注目する立場である。青木生子は「前の自然詠の部分とこれは何かとつてつけたようなちぐはぐな感じをおこさせる」と指摘し、この「矛盾」を問題視した<sup>(2)</sup>。これに対して窪田空穂は「音のみし泣かゆ」を「感動の極めて強いことを現す成語」として悲嘆ではなく「風光に対する懐かしみ」と解釈し<sup>(3)</sup>、清水克彦は称美と悲嘆を「明日香古京鎮魂」という目的を持った「平行する二つの具体的な情の表現」と捉えることで「矛盾」の解消を図った<sup>(4)</sup>。

しかし、そもそも美しい自然描写と激しい悲嘆を「矛盾」や「ギャップ」として捉える理解自体が、作品の有機的統一性を見落としている可能性がある。むしろ、この一首を始終一体の完成された作品として理解するならば、美と悲嘆の共存は矛盾ではなく、ある必然的な感情展開の結果として捉えるべきではないだろうか。この視点から見れば、「矛盾の解消」という方向性自体が、作品理解の出発点として適切かどうか再考する必要がある。

第二は、集団的心情を重視する立場である。鉄野昌弘は天武朝への敬仰と現実認識の対立から生じる集団的悲嘆と解釈し<sup>(5)</sup>、池原陽斉は「音泣く」の用例分析から「明日香の古き都に住んだ人々、とりわけ天武天皇その人」への思いと指摘した<sup>(6)</sup>。これらの研究は長歌末尾の激しい悲嘆を集団的な感情として捉えているが、いずれも反歌における「恋」表現については直接的な検討を行っていない。

第三は、梶川信行の「恋歌」説である。梶川はこの歌を旧都への懐古の情ではなく「宴席での『芸』として披露された『恋の歌』」と解釈し、従来の懐古歌的理解を根本的に覆そうとした<sup>(7)</sup>。しかし、この解釈には重要な問題がある。梶川は「恋」を男女間の恋愛感情として限定的に理解し、懐古的要素を完全に排除して恋愛歌として位置づけているが、『万葉集』における「恋」は必ずしも男女間の思慕のみを表すものではない。「恋」は対象への深い依恋や思慕を表す語であり、その対象や性質は多様である。したがって、「恋」表現の存在を根拠に作品全体を恋愛歌と断定することは、語の意味範囲を過度に限定する解釈と言わざるを得ない。

本稿では、この構造的関連性を明らかにするため、まず長歌冒頭部の「ありつつも止まず通はむ」という表現の性格を詳細に検討する。この表現が明日香への特殊な関係性を示すものであることを論証し、続いてこの関係性が作品全体においていかなる役割を果たし、最終的な「恋」という語彙選択にどのように結びついているのかを考察する。

## 〈二〉「ありつつも」の表現機能

前節で指摘したように、当該歌における感情表現の展開を理解するためには、まず冒頭部の「ありつつも止まず通はむ」という表現の性格を明確にする必要がある。この表現は「つがの木のいや継ぎ継ぎに玉葛絶ゆることなく」という植物描写から導かれており、その全体的な構造を検討することから始めなければならない。

「つがの木のいや継ぎ継ぎに」という表現は、人麻呂の「梅の木のいや継ぎ継ぎに天の下知らしめししを」（巻一・二九・近江荒都歌）を嚆矢とする。人麻呂が「樛木」の文字を当てたことについて、小島憲之は『毛詩』「樛木」との関連を指摘しており、<sup>(8)</sup> 鉄野昌弘はこれを皇統讚美の比喻と解釈する。<sup>(9)</sup> 確かに人麻呂歌では「いや継ぎ継ぎに天の下知らしめししを」と皇統讚美に直結し、金村歌でも「梅の木のいや継ぎ継ぎに万代にかくし知らさむ」（巻六・九〇七）、家持歌においても「梅の木のいや継ぎ継ぎに…万代に国知らさむと」（巻十九・四二六六）と、いずれも明確な天皇統治の永続を詠んでいる。

しかし注目すべきは、これらすべての例において「いや継ぎ継ぎに」の後に「天の下知らしめし」「万代に国知らさむ」という統治表現を明示的に修飾していることである。もし「いや継ぎ継ぎに」自体が皇統讚美として自明な表現であれば、このような付加は不要

なはずである。つまり、「いや継ぎ継ぎに」という表現自体は多義的であり、後続の表現によってその意味が確定されるのである。

赤人歌では、「いや継ぎ継ぎに」の後に続くのは「玉葛絶ゆることなく」である。「絶ゆることなく」について万葉集中の用例を見ると

見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆることなくまたかへり見む

（巻一・三七）

み吉野の秋津の川の万代に絶ゆることなくまたかへり見む

（巻六・九一一）

石走りたぎち流るる泊瀬川絶ゆることなくまたも来て見む

（巻六・九九一）

卷向の穴師の川ゆく水の絶ゆることなくまたかへり見む

（巻七・一一〇〇）

片貝の川の瀬清く行く水の絶ゆることなくあり通ひ見む

（巻十七・四〇〇二）

これらはいずれも特定の場所への継続的な訪問意志を表す定型表現である。赤人は皇統讚美の枠組み（「いや継ぎ継ぎに」）を借用しながら、「絶ゆることなく」によってそれを訪問継続の文脈へと転換している。

高松寿夫が指摘するように、他の用例では現在の皇統と結びつい

ているのに対し、赤人歌は「明日香の古き都」という「現在の王権からは切り放された所」に向けられており、皇統への言及が意図的に排除されている<sup>(10)</sup>。明日香がもはや皇室の所在地ではないにも関わらず、赤人は「ありつつも止まず通はむ」という強い意志を表明している。政治的価値を失った場所への継続的な通いを、なぜこれほど強く表現する必要があるのか。この矛盾を理解するためには、「ありつつも」という表現の持つ特殊な機能を検討する必要がある。

「ありつつも」において、「つつ」は継続を表す接続助詞であるが、重要なのは何が継続されているのかということである。「止まず通はむ」という表現は明確に人間の意志的行為を表している。では、この「通はむ」を修飾する「ありつつも」はどのような情感的機能を持つのか。なぜ単に「通はむ」ではなく「ありつつも」が必要だったのか。この表現の特殊性を明らかにするため、万葉集中の「ありつつも」の用例（当該歌以外計10例）を検討する。

- ① ありつつも君をば待たむうち靡く我が黒髪に霜の置くまでに  
(巻二・八七)
- ② 佐保川の岸のつかさの柴な刈りそねありつつも春来たらば立ち隠るがね  
(巻四・五二九)
- ③ この岡に草刈るわらはなしか刈りそねありつつも君が来まさば  
御馬草にせむ  
(巻七・一二九一)
- ④ 九月の有明の月夜ありつつも君が来まさば我れ恋ひめやも

- ⑤ 岡の崎廻みたる道を人な通ひそありつつも君が来まさむ避き道にせむ  
(巻十一・二二六三)

- ⑥ 今夜の有明月夜ありつつも君をおきては待つ人もなし  
(巻十一・二六七一)

- ⑦ 伊豆の海に立つ白波のありつつも継ぎなむものを乱れしめめや  
(一に曰く、「白雲の絶えつつも継がむと思へや乱れそめけむ」)  
(巻十四・三三六〇)

- ⑧ 安達太良の嶺に伏す鹿猪のありつつも我れは至らむ寝処な去り  
そね  
(巻十四・三四二八)

- ⑨ ありつつも見たまはむぞ大殿のこの廻りの雪な踏みそね  
(巻十九・四二二八)

- ⑩ 山吹は撫でつつ生ほさむありつつも君来ましつつかざしたりけり  
(巻二十・四三〇二)

①は磐姫皇后の歌として知られる。ここでは詠み手自身が待機の意志を直接語る。「霜の置くまで」は老いて髪が白くなるまでという極めて長い時間を意味する。このような長大な時間設定は、君の来訪が容易には実現しない状況を示しており、来訪の不確実性を暗示する。「ありつつも」は、この不在と不確実性を前提としながら、それでもなお待ち続けるという待機の継続を表現している。

②の構造を理解するには、「春し来たらば立ち隠るがね」という

条件と目的に注目する必要がある。春が来れば柴が茂って隠れ場所になるといふ期待が表明されている。「春し来たらば」といふ表現は、現在がまだ春ではなく、柴が十分に茂っていない不完全な状態を示す。この不完全な状態において、「な刈りそね」といふ禁止が発せられる。つまり、柴を刈ってしまったら春に隠れ場所にならないため、今は不十分でも刈らずに保持すべきだということである。「ありつつも」は、春の到来という条件が成就するまで、柴を刈らずに成長させ続けようとする意志を表現している。重要なのは、現在の不完全さ（柴が十分に茂っていない）と将来の実現（春が来て隠れ場所になる）との間に時間的隔たりがあり、「ありつつも」がその隔たりの中での柴の成長と保持を表している点である。

③の歌は「君が来まさば御馬草にせむ」といふ目的を前提としている。つまり、この草は君が来た時に馬の飼料として提供するために保持されるべきものである。「君が来まさば」といふ仮定は、君の来訪がまだ実現していないことを示す。「なしか刈りそね」は「なそ」といふ強い禁止の形式であり、草を刈らないよう命じている。この禁止の意図は、君の来訪という将来のために草を確保し続けることにある。「ありつつも」は、来訪が実現するまでこの準備状態——草を刈らずに保持する状態——を継続しようとする意志を表現している。

④において「九月の有明の月夜ありつつも」は、「有明」の「あり」といふ音が「ありつつ」の「あり」を導く同音反復による序詞的表

現である。「ありつつも君が来まさば」は、君が継続的に来てくれればという仮定を表し、「我れ恋ひめやも」といふ反語は、そうであれば恋焦がれることはないだろうに、という意味である。つまり、実際には君が継続的に来てくれないという現実を逆説的に示している。ここでは、継続的な来訪という願望と、実際にはそうでない現実との隔たりが表現されている。

⑤は「君が来まさむ」といふ推量表現が用いられる。推量は確実性の欠如を含蓄しており、君の来訪が不確実であることを示す。それにもかかわらず「人な通ひそ」といふ禁止によって道を他人が通らないように確保し続ける執着が、「ありつつも」によって表現される。君の来訪のために道を空けておくという準備状態の継続である。

⑥においても「今夜の有明月夜ありつつも」は④と同様に同音反復による序詞である。「ありつつも」は継続的に待ち続けることを表し、「君をおきては待つ人もなし」は君以外には誰も待たないという排他的な表現である。この「待つ」といふ行為は君の不在を前提としており、継続的な待機と君の不在という隔たりの中の強い恋情が表現されている。

⑦では「継ぎなむものを」といふ願望——関係を継続したいという思い——に対して「乱れしめめや」といふ反語が用いられる。反語の意味は「乱れさせるだろうか、いや乱れさせない」というものだが、この表現自体が「乱れ」といふ現実の不安定さが存在することを前

提としている。「ありつつも」はこのような関係の不確実性・不安定性の中での継続意志を表す。なお、この歌には「絶えつつも継がむと思へや乱れそめけむ」という異伝があり、関係が断絶する可能性という不安定さがより明示的に表現されている。

⑧において「ありつつも我れは至らむ」は、継続的に訪れ続けるという意志を表す。「寝処な去りそね」は相手に現在の場所に留まるよう求める命令であり、相手が去る可能性、すなわち関係の不確実性を暗示する。つまり、相手が去る可能性がある中で、それでもなお「ありつつも」継続的に通い続けるという意志が表現されている。

⑨は藤原房前への献上歌という儀礼的文脈にある。「見したまはむぞ」という敬語表現は上位者が将来雪を見るだろうとすることを示し、「な踏みそね」はその美しさを保つために雪を踏まないよう命じている。「ありつつも」は上位者が見るまで雪の美を保持し続けようとする意図を表す。この例のみ作者が第三者として上位者の将来の行為を想定する点で、他の例の個人的恋情表現とは性格が異なる。

⑩において「ありつつも」は山吹の花が持続的に咲き続けていることを示す。重要なのは、この花の持続的な開花が、「撫でつつ生ほさむ」という日々の手入れによって維持されているという点である。「撫でつつ」の「つつ」は継続を表し、「生ほさむ」は育てるという意志を示す。つまり、日常的に山吹を手入れし、花が咲き続け

る状態を保っている。一方「君来ましつつかざしたりけり」において、「来ましつつ」の「つつ」は君が反復的に来訪することを表す。「かざしたり」は来訪の度に簪に挿したことを示し、「けり」は詠嘆の助動詞で、そのような事実があったことへの感慨を表す。ここでは、日常的で持続的な手入れという努力と、君の反復的だが不定期な来訪という対比がある。花が持続的に咲いている「ありつつも」状態は、君が来た時のために維持されているが、君の来訪そのものは不確実である。つまり、持続的な準備と不確実な実現という隔たりの中で、それでもなお花を咲かせ続けるという構造が表現されている。

以上、個々の用例を詳細に検討してきた。見てきたように、これらの歌は表現形式が多様である。詠み手自身の心情を直接語る場合もあれば、第三者への呼びかけや禁止という形式もあり、儀礼的文脈で詠まれる例もある。しかし、個々の分析が示したように、このような表現形式の違いにもかかわらず、「ありつつも」は一貫して共通の機能を果たしている。すなわち、現実の欠如―対象の不在、来訪の不確実性、関係の不安定さ、時間的隔たり―という障壁が存在するにもかかわらず、ある状態を保持し続けようとする意志的態度を表現するという機能である。⑨を除く用例においては、このような隔たりににもかかわらず、一方的にでも自己の思いを持続させ、いつか実現するかもしれない可能性に向けて現状を保持し続けるという、個人的で強い恋情が表現されている。⑨は上位者への儀礼的

奉仕という異なる文脈で詠まれており、来訪自体は確實であるが、来るまでの時間的隔たりという点では他の例と構造を共有している。

当該赤人歌の場合、すでに見たように「いや継ぎ継ぎに」の後に皇統讚美がなく、明日香は「古き都」として現在の天皇や権力者が不在の場所である。もし現在も機能する都や天皇の行幸地であれば、⑨のような儀礼的表現が可能だが、政治的機能を失った明日香にはそもそも讚美すべき上位者が存在しない。だからこそ赤人は「ありつつも止まず通はむ」という、①から⑧・⑩と同様の個人的な恋情表現を選択せざるを得なかったのである。

さらに重要なのは、係助詞「も」を伴わない「ありつつ」の三例もすべて恋の歌であることである。

石橋の間々に生ひたるかほ花の花にしありけり **ありつつ見れば**  
 (卷十・二二八八番) 大君の御笠に縫へる有間菅 **ありつつ見れば**  
 (卷十・二二八八番) 大君の御笠に縫へる有間菅 **ありつつ見れば**  
 ど事なき我妹 (卷十一・二七五七番) 上つ毛野まぐはしまと  
 に朝日さしまきはしも **ありつつ見れば**

(卷十四・三四〇七)

第一例は卷十相聞部に、第三例は卷十四東歌の相聞部に収められた歌である。第二例は「我妹」という恋人を指す語が明示的に用いられており、恋歌であることが明らかである。これらはいずれも「ありつつ見る」という継続的な観察行為を通じて恋情を表現している。

このように、「ありつつ」という表現形式は、用例は少ないものの、恋歌の文脈において用いられる傾向が認められる。

ただし、これらの歌における「ありつつ」は、「継続的に見る」という状態の持続を表現するものである。第一例は「花にしありけり」という認識に至ることを、第二例は有間菅を見続けることを、第三例は朝日に照らされた景色を見ることを表現しているが、いずれも「逢えない」「来ない」「人目を多み」といった、現実の障壁や困難を明示する表現は含まれていない。前述の「ありつつも」十例で見られたような現実の障壁にもかかわらずという逆接的・強調的ニュアンスは、歌の表現上、明示的には確認できない。

この違いは、係助詞「も」の機能によって説明できる。「ありつつ」それ自体は、単に状態の持続・継続を表す表現である。しかし係助詞「も」が付加されることで、逆接・強調の機能が加わり、「ありつつも」は障壁や隔たりが存在するにもかかわらず、なおその状態を保持し続けるという意味を帯びることになる。つまり、現実と願望の間の緊張関係は「も」の付加によって初めて表現されるのである。「ありつつ」と「ありつつも」は、係助詞「も」の有無によって情感的機能が明確に区別されるのである。

以上の分析により、「ありつつも」が用いられる特定状況の性格が明らかになる。前述の十例において、「ありつつも」は現実と願望の間に横たわる隔たり―相手の不在、来訪の不確実性、関係の不安定さ―を前提としている。例①―⑧、⑩においては、このような

隔たりにもかかわらず、一方的にでも自己の思いを持続させ、いつか実現するかもしれない可能性に向けて現状を保持し続けるという、個人的で強い恋情が表現されている。⑨は上位者への儀礼的奉仕という異なる文脈で詠まれており、来訪自体は確実であるが、来るまでの時間的隔たりという点では他の例と構造を共有している。

このような「ありつつも」の機能を踏まえれば、赤人が明日香への思いを表現する際、この語彙を選択したことの意味が明らかになる。明日香は「古き都」であり、すでに都としての機能を失っているという現実と、それでもなお通い続けたいという願望との隔たりを、赤人は恋愛感情における不在と希求の構造として捉えたのである。

ここで重要なのは、万葉集には「ありつつも」の後に「通ふ」が続く用例が当該歌以外に存在しないことである。しかし、場所への継続的訪問を表す類似表現として「あり通ふ」が存在する。この「あり通ふ」との比較により、なぜ赤人が「ありつつも止まず通はむ」という独特な表現を創出する必要があるのかが明らかになる。

「あり通ふ」の用例は大きく二つに分類できる。

### 第一類) 現在機能している場所への通い

a) 大君の遠の朝廷とあり通ふ高門を見れば神代し思ほゆ

(卷三・三〇四)

b) やすみしし我が大君の神ながら高知らせる 印南野の大海

の原の…あり通ひ 見さくもしるし 清き白浜

(卷六・九三八番・赤人)

c) 神代より吉野の宮にあり通ひ高知らせるは山川をよみ

(卷六・一〇〇六・赤人)

d) やすみしし我が大君のあり通ふ難波の宮は…御食向ふ味経

(卷六・一〇六二)

e) あり通ふ難波の宮は海近み海人娘子らが乗れる舟見ゆ

(卷六・一〇六三)

f) 山背の久迹の都は…あり通ひ 仕へまつらむ 万代までに

(卷十七・三九〇七)

g) もののふの八十伴の男の思ふどち心遣らむと馬並めてう

ちくちぶりの…玉櫛笥 二上山に延ふ葛の行きは別れず あり

通ひ いや年のはに… (卷十七・三九九一)

h) 布勢の海の沖つ白波あり通ひいや年のはに見つつ偲はむ

(卷十七・三九九二)

i) 天離る 鄙に名懸かす 越の中 国内ことごと 山はしもしじに

あれども…あり通ひ いや年のはに… (卷十七・四〇〇〇)

j) 片貝の川の瀬清く行く水の絶ゆることなくあり通ひ見む

(卷十七・四〇〇二)

k) 高御座 天の日継と 天の下 知らしめしける 天皇の 神の命

の 畏くも 始めたまひて 貴くも 定めたまへる み吉野のこの

大宮に あり通ひ 見たまふらし… (卷十八・四〇九八)

l) いにしへを思ほすらしも我ご大君吉野の宮をあり通ひ見す

(卷十八・四〇九九)

m) 布勢の海に小舟つら並めま權掛けい漕ぎ廻れば平布の浦にあり通ひ見つつ偲はめこの布勢の海を

(卷十八・四一八七)

これらの用例に共通するのは、対象となる場所が現在においても通う価値を持っていることである。天皇の朝廷、行幸地、離宮、都、神聖な山、景勝地など、いずれも現在進行形で意味のある場所である。特に注目すべきは、赤人自身の用例 (b、c) が典型的にこの類型に属することである。印南野は行幸地として、吉野は離宮として、いずれも天皇と現在進行形で関わりを持つ場所である。

## 第二类) 特殊な用法

n) 鳥翔成あり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知らむ

(卷二・一四五)

o) はしきかも皇子の命のあり通ひ見しし活道の道は荒れにけり

(卷三・四七九)

p) 天地の初めの時ゆ天の川い向ひ居りて一年にふたたび逢はぬ妻恋ひに物思ふ人天の川安の川原のあり通ふ出の渡りに

(卷十・二〇八九)

q) 逢はむとは千度思へどあり通ふ人目を多み恋つつぞ居る

(卷十二・三一〇四)

これらの用例は、第一類とは性格を異にする。n) は有間皇子が結んだ松を詠む歌で、特定の皇子の記憶と結びついた個人的な場所への訪問である。o) は故皇子が生前に通った道を回想する表現であり、過去の行為への追慕が主題となっている。p) は七夕伝説における天の川の渡りという神話的空間での往來を詠む。q) は恋人のもとへ通いたいが目が多くて通えない状況を嘆く歌である。ここの「あり通ふ」は人々の往來を表し、第一類の場所への通いは性格を異にする。

これらに共通するのは、第一類のような天皇や公的権威と結びついた場所、現在も訪れる価値を持つ公共的な場所ではなく、個人的な記憶、神話的世界、私的な恋愛といった、より私的な文脈で用いられている点である。しかし、用例数から見ても、「あり通ふ」の基本的な用法は第一類であり、現在においても客観的価値を持つ場所への継続的な訪問を表す表現として理解できる。

ところが、当該歌の「明日香の古き都」は、これらのいずれの類型にも完全には適合しない。明日香は赤人の活動期間(神龜年間)において、すでに都ではなくなっている。平城京への遷都(和銅三年・七一〇年)により、明日香は政治的中心としての地位を失い、「古き都」となっていた。つまり、天皇が常駐せず、朝廷機能も移転した場所である。

物理的には明日香という場所は存在するが、「都」としての実質的機能は完全に失われている。この状況は、「あり通ふ」の第一類（現在機能している場所）の条件を満たさない。また、第二類のような特殊な意味を持つ場所とも異なる。明日香は単に過去の都であり、現在の価値を失った場所なのである。

詠者は個人的に明日香に通う価値を見出しており、この点で「あり通ひ」の第二類——個人的な執着による通ひ——に近い性格を持つ。しかし第二類の対象が恋路や松といった非政治的・私的な事物であるのに対し、明日香は過去の政治的中心地という特殊な対象である。つまり、個人的執着という情感構造は第二類に通じるが、対象の性質において従来の用法とは異なる新たな展開を示している。

つまり、「ありつつも止まず通はむ」という表現は、明日香が「あり通ふ」に準ずる場所ではなくなったという現実認識を前提として、それでもなお通い続けたいという強い個人的願望を表明するものである。この個人的で強い思慕の表明が、続く対句表現における理想的明日香像の構築と、その破綻による激しい悲嘆へと展開していく起点となっているのである。

### 〈三〉 対句における明日香の自然と人事

当該歌の「明日香の古き都は」以降の対句表現は、「山高み川とほしろし」「春の日は山し見がほし秋の夜は川しさやけし」「朝雲に

鶴は乱れ夕霧にかはづはさわく」という三段階で構成されている。

注目すべきは、これらの異なる時間設定を一首の中で並列していることである。現実には春と秋、朝と夕を同時に体験することは不可能である。この対句は現実の一次的体験ではなく、「ありつつも止まず通はむ」という意志が繰り返し実行されたかのような印象を与える。「見るごとく」という長歌末尾の表現は、この反復的訪問を彷彿とさせる。

ここで重要なのは、この明日香描写が従来の荒都歌とは根本的に異なることである。人麻呂の「近江荒都歌」（巻一・二九）では長歌に「春草の茂く生ひたる」「夏草の深く生ひたる」と草の繁茂による荒廢が描かれ、反歌では「さざなみの志賀の辛崎幸くあれど大宮人の舟待ちかねつ」（巻一・三〇）と人の不在が嘆かれる。

これに対し、赤人の明日香描写には荒廢の影はない。「春の日は山し見がほし秋の夜は川しさやけし」という表現は、現在も美しい自然が保たれていることを示す。明日香は戦乱ではなく平和的な遷都によって都としての機能を失ったため、自然景観は美しさを保持している。

しかし、美しい自然の中で決定的に欠落しているのは人事である。「朝雲に鶴は乱れ夕霧にかはづはさわく」において活動するのは自然の生物のみである。人麻呂が「大宮人」の不在を直接嘆いたのに対し、赤人は人事を最初から描かない。この人事の完全な不在が、明日香の「古き都」としての現実を逆説的に浮かび上がらせる。

この表現選択は、第二節で見た「ありつつも」の機能と連動する。「ありつつも」が恋愛感情における現実の不完全さを前提とした表現であったように、明日香は物理的には現存し美しいが、都としての機能は失われている。この時間的隔たりの中で、現在の明日香に「あり」ながら過去を求め続ける構造が示される。

恋歌において、手に入れがたい対象ほど理想化される。「恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽くしてよ長くと思はば」(巻四・六六一、坂上郎女)では、実際の逢瀬の短さゆえに、理想的な関係への希求が強まる。赤人の明日香描写は、このような恋歌の心理構造―不在ゆえの理想化―と同じ感情構造を持つ

完璧な自然美を描けば描くほど、都としての本質的要素の不在が際立つ。春夏秋冬、朝昼夕夜のすべての時間において美しい明日香しかしそこには、かつての賑わいがまったく存在しない。この理想と現実の落差が、「見るごとに音のみし泣かゆ古思へば」という激しい悲嘆を必然的に生む。

第一節で指摘したように、「古思ふ」という意志的表現の選択は重要である。いくら過去を積極的に喚起しようとしても、現実の明日香には人事が不在である。この努力と現実の隔たりが、恋愛感情における一方的な思慕と同じ構造を持つ。

従来の研究が問題とした美しい自然描写から悲嘆への展開は、矛盾ではなく恋歌の感情構造として理解すべきである。「ありつつも」で始まり、理想的明日香像を構築し、不在を痛感し、最終的に「恋」

として定義される。この一連の展開は、恋歌の構造を懐古歌に適用した新たな抒情技法なのである。

#### 〈四〉反歌における「恋」の語

反歌の「明日香川淀去らず立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらなくに」において、「恋」という語が選択されていることは、この歌全体の性格を決定づける。

万葉集において過去への思慕を主題とする歌は多数存在する。しかし、それらの感情表現を見ると、多くは「悲し」「思ほゆ」といった語彙で表現され、「恋」を直接用いた例は極めて稀である。懐古的文脈において「恋」が用いられる例として、額田王の「いにしへに恋ふらむ鳥はほととぎすけだしや鳴きし我が思へること」(巻二・一一二)がある。<sup>(11)</sup>しかしこれは弓削皇子との相聞歌の文脈で詠まれており、「恋ふる」主体は「鳥」という第三者的存在である。中国の故事における蜀の望帝が死後ほととぎすとなって往時を偲んで鳴いたという「蜀魂」の典故を踏まえ、過去への愛着を間接的に表現している。<sup>(12)</sup>

一方、赤人の反歌における「恋」は、明日香川の霧という現実の自然現象を序詞として、「思ひ過ぐべき恋にあらなくに」という形で作者自身の感情として直接表現されている。ここでの「恋」の主体は明確に作者自身であり、対象は「明日香の古き都」という抽象

化された過去の時空である。

「恋」は確かに主として男女間の思慕を表す語であるが、万葉集においてはより広い意味領域を持っている。重要なのは、「恋」が対象への深い依恋や思慕を表す語彙であり、その対象や性質は多様であることだ。

額田王の例と比較すると、赤人の表現の特異性が明らかになる。額田王が「鳥」という媒介を通じて間接的に「いにしへ」への恋を表現し、一首の中での表現にとどまるのに対し、赤人は長歌冒頭の「ありつつも止まず通はむ」から反歌の「思ひ過ぐべき恋にあらなくに」に至るまで、一貫して作者自身の感情として直接表現している。

明日香という場所は現存するが、「古き都」としての明日香は時間的隔たりによって失われている。通常の恋歌では、恋人は現存するが空間的距離によって会えない。赤人はこの二つの隔たりを同質のものとして扱い、時間的喪失を恋愛的喪失として表現する。これにより、懐古の情を恋情として表現する独自の技法が成立したのである。

## 〈五〉 結 論

本稿の分析により、赤人「登神岳作歌」における「恋」表現は、従来の懐古歌とは異なる独自の試みであることが明らかになった。

当該歌の最も重要な特質は、明日香をめぐる複雑な感情を、極度に個人化された表現技法によって統合している点にある。冒頭の「ありつつも止まず通はむ」は明日香への個人的な願望を表明し、対句表現は理想化された明日香を構築し、反歌の「思ひ過ぐべき恋にあらなくに」において「恋」（万葉集原文では「孤悲」という語によって、その感情を極度に個人的な孤独と悲哀として定義づけている。長歌は「ありつつも止まず通はむ」という個人的願望を「起」とし、理想的な明日香の自然美の描写を「承」として展開し、「見ること」に音のみし泣かゆ古思へば」という激しい悲嘆で「転」じ、反歌の「思ひ過ぐべき恋にあらなくに」で「結」として感情を定義づけるという、明確な起承転結の構造を持つ。

明日香への思いは、過去への単純な懐古でも現在への評価でもなく、時間的隔たりによって永遠に失われた対象への持続的な思慕として再定義される。赤人が明日香を詠むにあたって直面したのは、この対象の持つ特殊性である。明日香は美しい自然景観を保ちながらも、都としての政治的機能は完全に失われている。従来の懐古歌であれば、荒廃した都の悲哀を詠む（人麻呂の「近江荒都歌」）か、あるいは天皇が現在も行幸する景勝地を讚美する（赤人自身の「吉野讚歌」）かのいずれかであった。しかし明日香は、美しさが現存するがゆえに、かえって失われたものの大きさが際立つという、讚美と悲哀が同時に存在する矛盾した状況にあった。

この特殊な状況を表現するために、赤人は恋歌における不在の対

象への持続的な思慕という感情構造に着目した。赤人は恋歌と懐古歌の感情構造における共通性―現実と願望の隔たり、失われた対象への執着―を見出し、両者を融合させることで、明日香という対象の特殊性を表現する独自の手法を創出したのである。

注

- (1) 太田豊明氏も「思ふ」が現実を意志的に心の中に存在させようとする積極的な行為であることを指摘している（太田豊明「山部赤人『神岳作歌』考」『国文学研究』一〇五号、一九九一年）。
- (2) 青木生子「山部赤人における自然の意味」『日本叙情詩論』（弘文堂・一九五七年）
- (3) 窪田空穂『萬葉集評釈 第三卷』（東京堂、一九五五年）
- (4) 清水克彦「称美と悲嘆―赤人の神岳の歌について―」『女子大國文』一〇六号（一九八九年十二月）に所収
- (5) 鉄野昌弘「山部赤人『登神岳作歌』『叙説』三七号（二〇一〇年）に所収
- (6) 池原陽斉「山部赤人『登神岳』歌の主題」『女子大國文』一六二号（二〇一八年一月）に所収
- (7) 梶川信行「赤人の《芸》―『登神岳作歌』」松田好夫先生追悼論文集『万葉学論考』（統群書類従完成会、一九九〇年四月）に所収
- (8) 小島憲之「萬葉集と中国文学との交流」『上代日本文学と中国文学中』（塙書房、一九六四年、初出一九五四年）
- (9) 鉄野昌弘「山部赤人『登神岳作歌』『叙説』三七号（二〇一〇年）に所収
- (10) 高松寿夫「山部赤人『神岳作歌』―王権不在の廢都歌」『上代和歌史の研究』（新典社・二〇〇七、初出一九九二）

(11) 注(10)高松は、この歌における「恋」が単なる恋愛感情ではなく、より広い意味での思慕を表すことを指摘している。本稿では、この指摘を踏まえつつ、赤人が同様の拡張された「恋」の用法を、より徹底的に展開したことに注目する。

(12) 額田王歌の「いにしへに恋ふらむ鳥」と蜀魂の故事との関連については、伊藤博『萬葉集釈注一 卷第一 卷第二』（集英社文庫ヘリテージシリーズ、二〇〇五年）を参照。